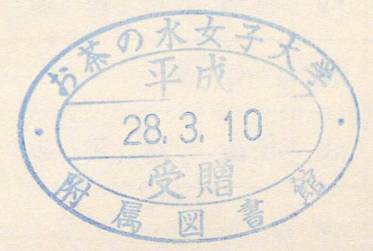


4P. 4. 23

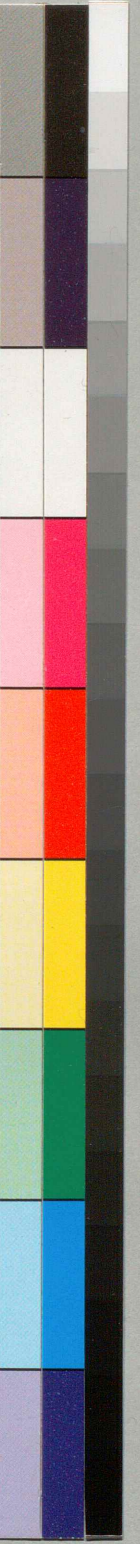
一般教育総合コース

# 自然と文明

1973年度



お茶の水女子大学



講 義 日 程

( 講義日時=土曜日第三・第四時限 10:20~12:00 )

月	日	系列	担当講師	月	日	系列	担当講師
4	21	序説	中川教授	11	24	自然	矢部教授
	28	人文	茅野教授	12	1	"	"
5	12	"	"		8	人文	近藤教授
	19	自然	岩田教授		15	"	"
	26	"	"		22	社会	山室教授
6	2	社会	尾鍋教授	1	12	"	"
	9	"	"		19	自然	柳田教授
	16	"	正井助教授		26	"	"
	23	"	"	2	2	人文	中川教授
	30		ゼミナール		9	"	"
9	22	社会	富田助教授		16		ゼミナール
	29	"	"		23		試 験
10	27	自然	中西教授				
10	10	"	"				

目 次

「自然と文明」序説 ..... 中川 信 1 頁

第一講 自然と文化 ..... 茅野良男 3 頁

第二講 自然観の変遷 ..... 岩田義一 4 頁

第三講 広義のアナーキズムの歴史的位 置 ..... 尾鍋輝彦 5 頁

第四講 都市と風土 —— 都市環境論 ..... 正井泰夫 6 頁

第五講 人類進化 ..... 富田 守 7 頁

第六講 自然現象のロジック ..... 中西正城 8 頁

第七講 科学技術とその限界 ..... 矢部章彦 9 頁

第八講 中国文学中国哲学のちばから ..... 近藤光男 11 頁

第九講 人間の自然と社会 ..... 山室周平 13 頁

第十講 人類と自然環境 ..... 柳田為正 14 頁

第十一講 現代文学における人間像の探究 ..... 中川 信 16 頁

## 総合コース

茅野・近藤・中川 (人文関係)  
尾鍋・正井・富田・山室 (社会 " )  
岩田・中西・矢部・柳田 (自然 " )

一般教育関係科目の各分野にわたる共通な一つの主題について、総合的に学ぶものである。

主として二年生対象。

履修単位数：同一年度において4単位まで履修可能で、二年度までの計8単位が一般教育科目の基礎単位として数えられるが、一分野については4単位をこえてはならない。

セミナー：総合コースの成果をあげるため前・後期、各1～2回程度セミナーを行なう。

試験方法：学年度末に試験が行なわれるが、その際各担当講師から試験問題が示され、学生はそのなかから受験科目をきめる。  
三分野のうちいずれの分野の科目を受験することも自由であるが、一分野について2単位まで、全体で計4単位を取得限度としている。

## 一般教育総合コース「自然と文明」序説

今日学問が専門化し、技術がいよいよ細分化する傾向を強めているとき、そうした専門教育を受ける人びとが各自その専門領域に閉じこもることなく、広い総合的視野に立ち、変動する現実社会に対して適格な判断を下しうる批判精神を養うよう強く望まれているように思う。高等教育の場である大学での一般教育のそれぞれの講義は、学生諸君が専門課程に入る前に、各分野に対する基礎的概観を与え、広い視野のもとにそれぞれの専門分野の研究に従事するのを可能にする準備作業ともいえよう。

一般教育での諸講義はこうした意味で有意義であり、その役割を充分果しているとはいえ、しばしば個立したままにとどまり、その間の有機的関連、総合性をややともすれば欠くといった傾向も見られた。わがお茶の水女子大学では、この一般教育における知識の総合性を重視し、同一テーマのもとに諸専門の教官がそれぞれの角度と立場から、その知識・見解を述べ合う共同作業によって、学問の交流ならびに総合化という一般教育での新しい形態の探索をはじめたのは1956年のことである。以来17年間学生諸君の積極的な協力のもとにすすめられてきた本講座は、日本での新しい一般教育のあり方を示すものとして、他大学からも多くの関心がよせられるにいたっている。

われわれはこれまでの成果をふまえ、十分に定着したかにもよる「総合コース」を一段と効果あるものにするよう、ともに一層の努力を続けようではないか。そのためには教官側の努力もさることながら、学生諸君が受動的態度に甘んじず、共通テーマのもとに展開される各講師の講義を契機として、その論点を比較・対照する作業を通して、めいめいが自分なりの判断のもとに総合を企ている積極性を持ち、それによって前・後期それぞれ一回ずつ予定されているセミナーが活発な対話の場となるよう開講に先立って期待したい。

さて、本年度のテーマは、「自然と文明」であるが、「自然」という語の意味を単にわれわれをとり囲む環境、自然界という意味にとどめず、西欧語(nature

英・仏語、Natur 独語)に見られるような「人間の本性」といった意義も含めた広い概念で考えたい。この「ありのままの姿」に対して、人間が作り出したもの、すなわち技術・思想、その産物が文明であり文化なのである。人間の歴史は未開の状態からの脱出であり、文明化、技術革新を通して、人間のより多くの幸福が獲得されるという道を辿ってきたし、今なおその途上にあるといえよう。しかしこの文明化が、人間を困む環境としての自然、また人間の本性としての自然を破壊しつつあるのではないかという疑問が近年大きく投げかけられはじめるにいたった。この時点において、自然とは何か、文明とは何か、それは共存しうるものなのか、対立するものなのか、こうした問題を、われわれはこの1年の総合コースの論点として、ともに考えていこうではないか。

序説としては、フランス大革命の知的原動力となった啓蒙思想家と呼ばれる人たち(モンテスキュー、ヴォルテール、ディドロ)とそれと同じ反旧体制の立場にありながら、「自然と文明」の問題については進歩を信じる啓蒙思想家たちと対立し、独自の見解を展開したルソーを取りあげ、このテーマの出発点としたい。

#### 参 考 書

- ルソー 「学問・芸術論」岩波文庫  
" 「人間不平等起原論」岩波文庫  
桑原編 「ルソー」岩波新書

## 第一講 自然と文化

茅野良男

1. 西洋の哲学史を題材にして、西洋人の自然観を、*physis*、*natura*、*Natur* という文字を手がかりに探してみたい。これと対照をなす限りにおいて、日本人の自然観の一端だけでも追跡する必要に迫られるであろう。
2. うえと同じ手法で、西洋人の文化・文明観を、*cultura*、*culture*、*Kultur* などの文字から探してみたい。
3. 文化をもち、文明をもつこと、社会や歴史をもつこと、そしてこの「もつ」の主体である人間が自然の中に出現したこと、これらの「こと」の意味を、限られた時間の中で問い直してみたい。

#### 参 考 書

- 高津・齊藤『ギリシャ・ローマ古典案内』岩波文庫別冊(1に関して)  
ブルトマン『原始キリスト教』新教出版社(1に関して)  
三枝博音『日本の思想文化』第一書房(1に関して) 潮出版社  
梅棹・多田編『論集・日本文化』3冊講談社現代新書(1に関して)  
茅野良男『歴史のみかた』紀伊國屋新書(1および2に関して)  
茅野良男『哲学的人間学』塙書房(2および3に関して)  
茅野良男『認識論入門』講談社現代新書(2および3に関して)  
茅野良男「哲学の日本語」『言語』昭和48年1月(1および2に関して)  
茅野良男「もの」『講座哲学』第二巻・東京大学出版会(1、2、3に関して)  
三枝博音『技術の哲学』岩波全書(1、2に関して)  
ハイデガー『ヘルダーリンの詩の解明』手塚・齊藤・土田・竹内訳・理想社(1に関して)  
ショーペンハウアー『意志と表象としての世界・正編(1)』齊藤・笹谷・山崎・加藤・茅野訳・白水社(1に関して)

## 第二講 自然観の変遷

岩田 義一

様々な相をみせ、様々なに変化する自然は一体何から出来ているのかという問いは紀元前6世紀ころの人タレースによって発せられた。そしてその問いを現代の物理学者たちはますます巨大化する装置を用いて、なお追求しつづけている。その道程において、運動の法則とか、相対性理論とか、量子力学とかが生まれて、私たちの視野を拡大し、視力を鋭敏にしてきた。古代における原子論の成立を回想し、現代の素粒子論を展望してみたい。

### 参考書

ルクレティウス『事物の本性について』筑摩書房

ガードナー『自然界における左と右』紀伊國屋書店

## 第三講 広義のアナーキズムの歴史的位置

尾鍋 輝彦

近代から現代へと文明が発達し、社会機構が複雑になっていくと、人間の自然的本性にそむく作用が生まれやすい。これに抵抗する思想および運動として、広義のアナーキズム（無政府主義）がいろいろな姿をとって現われる。ニュー・レフト（新左翼）の中にもこれが含まれているといわれる。

このような現象は、社会体制、社会改革思想の相違によって、ちがった形をとっている。社会に関する考えのちがいがどのように作用しているかが興味深い。

この問題を考える場合には、「文化」の発展が生みだした「社会と人間」に関する「科学」の成果を無視して、ただ「原点に帰れ」という態度では不生産的である。

以上のこととあわせて、「文化と文明」「近代と現代」という問題にもふれたと思う。

### 参考書

堀米庸三編 歴史としての現代（人間の世紀、第2巻）潮出版社

木村尚三郎 歴史の発見 （中公新書）中央公論社

## 第四講 都市と風土 —— 都市環境論 三葉

著者 藤原

正井 泰夫

人類の居住単位としての都市は、しばしば人類の文明の焦点としてとらえられ、人類の生活をおびやかす「恐ろしい自然」の暴力から解放された所とみられてきた。だが、その都市もまた、所詮は風土と切り離して考えることのできないものである。

ルッソーの「自然に帰れ」という思想に大きく影響されて、19世紀末紀より、主としてイギリスで田園都市運動が起きた。それは、海をへだてたヨーロッパ大陸やアメリカにも波及し、さらに第1次大戦後には日本にも入ってきた。その間の時間的差異はあるにせよ、これらの国における田園都市のあり方や普及度には、かなり大きな差異が見られた。もちろん、経済力や人口密度の差も考慮しなければならないが、自然環境とそれによって影響された人々のものの考え方（自然への対応のしかた）に大きな違いがあるからである。特に「緑」に対する考え方の違いは無視し得ない。また、自然環境と直接的な関連のある建築材料の問題も、今日の都市を考える際に重要である。

参考文献 (巻末) (著者の個人) 片岡の「都市」 藤原三葉

### 参考文献

和辻哲郎：風土 岩波書店

正井泰夫：都市の環境 三省堂

西川治（編）：都市と都市観（西欧文化への招待16） グロリア・インターナショナルINC

## 第五講 人類進化 藤原 三葉

著者 藤原

富田 守

200万年の人類進化史において、ヒトは猿人、原人、旧人の各段階を経て新人に至ったと考えられる。その間、身体形質に諸変化がみられるわけであるが、まずそれらの特徴点を明らかにする。また、ヒトの進化においてはヒトがうみ出し、所有するところの文化 — 生活技術が深く関係していると考えられており、自然環境のほかにこの文化的なものの影響によって、ヒトの進化は他の動物にみられぬ独特の様相を示しているとも考えられる。

### 参考書

植原和郎 「人類進化学入門」 中公新書

鈴木 尚 「化石サルから日本人まで」 岩波新書

1) 大塚啓成編訳 猿人の限界 アイヤメント社(1972)

2) 藤原三葉 知識と知恵のか 文芸春秋社(1988) 著者 藤原

3) Berthold Russel, ... [著者の本] 復讐 1

4) Knowledge and ... [著者の本] 復讐 2

5) George Allen ... [著者の本] 藤原・谷半 8

6) The Scientific Outlook (全上出版社)

7) Human Knowledge (全上)(1966)

8) 富田新一ほか：合成洗剤の環境衛生、食品衛生上の最近の諸問題

9) 化学 21, 515 (1972)

10) 資料

11) 衣料処理剤に関する基礎資料(科学技術誌, 1970)

## 第六講 自然現象のロジック

中西正城

ここでは自然ということばを自然界の意味に解したい。いま自然科学、特に化学の眼でながめると、物質が存在し変化する場として自然界を見ることができる。そこではありとあらゆる種類の物質が、それぞれ環境の影響を受けて、なんらかの法則に従がい、決った方向に向って変わり続けているものと理解される。

自然界のできごとの中から、なにかわれわれの身近に起っていることがらを例にとって、物質がどんな変わり方をし、その結果がどんな形で現われてくるかを考察してみたい。

物質のもっている物理的・化学的性質には普遍的側面と個別的側面があるのだが、物質が変化するとき、その両者がどのような関係で現われてくるかということも自然を追究するものには関心のあることがらである。

自然界に変化をひきおこす要因の一つとして人間が営む文明社会の影響が大きく取上げられているのは衆知のことだが、この機会に自然界全体の物質変化のありさまを掘り下げて考えてみるのも無意味ではあるまい。

### 参 考 書

1. 北野 「水の科学」 NHKボックス
2. 島 「元素からみた地球」 講談社ブルーボックス
3. 半谷・安部 「社会地球化学」 紀伊国屋新書

## 第七講 科学技術とその限界

矢部章彦

自然を自然現象の流れの中でとらえた前講をうけて、科学技術が前面に押出されて来ている現代社会に鑑み、科学技術を制御する人間の姿勢につき論評を試みたい。

われわれをとりまく自然環境と、人間の営む社会生活との間に、はっきりした矛盾があらわれるようになったのは、原爆を頂点として悲惨な結末を告げた第二次世界大戦以降のことであろう。

そして、はやくも人類の繁栄と福祉を支えるべき成長の方向に赤信号が点ぜられていることは、人類のひとしく認めるところである。

このような背景の中で、われわれのごく身近に起っている二三の問題、たとえば、石ケンと合成洗剤、衣料による皮膚障害、日用品に含まれる化学物質の毒性、などを例にとりあげ、人間の“知識と知恵”の結びつきを軸として考察を試みることにする。

### 参 考 書

- 1) 大来佐武郎訳 成長の限界 ダイヤモンド社(1972)
- 2) 笠 信太郎 知識と知恵ほか 文芸春秋社(1968)
- 3) Bertland Russel :
  - a "Knowledge and Wisdom" in "Portraits from Memory" George Allen & Unwin Ltd, London, (1956)
  - b The Scientific Outlook (全上出版社)
  - c Human Knowledge (全上)(1966)
- 4) 富山新一ほか: 合成洗剤の環境衛生、食品衛生上の最近の諸問題  
油化学: 21, 515(1972)
- 5) 資 料
  - a 衣料処理剤に関する基礎資料(科学技術庁 1970)

- b 衣料品安全対策会議報告書（通産省 1972、1973）
- c 日用品等に含まれる化学物質に関する委員会報告書（厚生省 1973）

参考文献

（以下は左ページの透写された文字）

- (1) 大東亜の発展と文明の交流 (1972) (社) 講談社
- (2) 大東亜の発展と文明の交流 (1972) (社) 講談社
- (3) Bertrand Russell: "Human Knowledge and Its Limits" (1948)
- (4) 富山第一高校: 合衆国への進出と、食品衛生上の問題 (1972)

### 第八講 中国文学中国哲学のたちばから

近藤光男

中国において、文明の形態が変化し発展して今日の中国がある、その過程の中で大きな画期が、第十世紀唐五代までと第十一世紀宋以後との間に認められるとするのは、おおむね異論のないところであろう。

燃焼する感情をうたい成した唐の詩人たちのもっていた生活環境に比べて、平静な思考で人間の感情を分析もし止揚もした宋の詩人たちのもったそのほうが、はるかに今日のわれわれに近いものであった、と見うけられる。五經正義を完成した唐の学者たちはまだ中世に、理気の哲学を宇宙構造論から説き起こした「宋儒」とよばれる学者たちは近世に息づいた、といってもよいわけである。

ところで今日、中国の美と真実を知ろうとする若い人々において、『史記』『論語』そして唐詩あたりは、なかなか身近かな教養となっているのが喜ばしい反面、宋以後、十九世紀清末に至るまでは、まだ必ずしも身近かにはないようである。

このたび二回の講述を

1. 東坡詩における自然観照
2. 戴震における自然哲学

としてみたい。東坡とは宋の蘇軾(1036-1101)、字は子瞻、東坡はその号。地上の人間の生活を熟視しつづける文学の態度を確立した。戴震(1723-1777)、字は東原、清朝考証の学の巨匠。宋儒の道学に反対して人間の欲情を肯定した。そこで、東坡においては自然の善意への篤信が、戴震においては自然の秩序への篤信が、それぞれの文学哲学の核心に、活動のエネルギーとして在る、と見うけられることについて述べよう。

#### 参考資料

- 吉川幸次郎『宋詩概説』(筑摩書房「吉川幸次郎全集」第13巻所収)
- 小川環樹『風と雲—中国文学論集—』(朝日新聞社、昭和47年)



近藤光男『蘇東坡』（集英社「中国詩人選7」昭和47年）

安田二郎・近藤光男『戴震集』（朝日新聞社「中国文明選8」昭和46年）

長 米 春 彦

中の野原のよ、よき地國中の日々「遊遊」が安んずる遊の閑文、アツク國中  
るやさるのよの野原のよ、よき地國中の日々「遊遊」が安んずる遊の閑文、アツク國中  
るやさるのよの野原のよ、よき地國中の日々「遊遊」が安んずる遊の閑文、アツク國中  
るやさるのよの野原のよ、よき地國中の日々「遊遊」が安んずる遊の閑文、アツク國中  
るやさるのよの野原のよ、よき地國中の日々「遊遊」が安んずる遊の閑文、アツク國中  
るやさるのよの野原のよ、よき地國中の日々「遊遊」が安んずる遊の閑文、アツク國中

### 第九講 人間の自然と社会

—— 孤立のふたつの場合に関連して ——

山 室 周 平

孤立という極限的な状況における人間の自然と社会について考えてみる。

- I 自然のなかでの人間の孤立
  - i 「自然状態」のなかでの孤立人
  - ii 狼の環境で育った娘たち

- II 社会のなかでの人間の孤立
  - i 現代社会のなかでの非人間化と孤立
  - ii ホーソン工場における実験的研究

#### 主な参考文献

Hobbes, T., Leviathan 1651 (ホブズ著 水田洋訳「レヴァイアサン」1, 2, 岩波文庫)

Geselle, A., Wolf Child and Human Child. 1941 (ゲゼル著生月雅子訳「狼にそだてられた子」新教育社)

Hayes, C., The Ape in Our Houses. 1951 (ヘイズ著林寿郎訳「密林から来た養女」法政大学出版局)

Weber, M., Wirtschaft und Gesellechaft. Grundriss der Sojial ökonomik, Bd. III. 1922 (ウェーバー著 阿閉哲男他、部分訳「官僚制」創文社)

Riesman, D. and Others, The Lonely Crowd. 1955 (リースマン他著、加藤秀俊訳「孤独なる群集」みすず書房)

Roethlisberger, F.J., Management and Morale. 1941 (レースリスパー著、野田、川村訳「経営と勤労意欲」ダイヤモンド社)

## 第十講 人類と自然環境

### 生態学(エコロジー)の役割

柳田 為 正

生命概念は生物“個体”の生命を、生物学は個体生物学を、それぞれ手始めのベースとして、これまで考えられ進められてきた。これにはまことに自然な理由があり、人間自身の生きかた(意識や実存)が(とくに近代には)個人ベースのものであることも関係があろう。そして自然科学としての分析志向性は、個体レベルから細胞レベルへ、さらには細胞下レベル、分子レベルへと、もっぱら掘り下げの方向で生活過程の理解に相次ぐ成果を挙げてきた。生態学はこの主流に逆らうものとして、生物の住み家(oikos)の学、家計の学の名を名乗り、個体以上の—生物集団の—生活態様の理解を目ざした。個体群→生物群集→生態系といった高次の生活体制レベルが設定されていき、ついにはこの地球表面全体を単一の巨大(微小?)な生態率とみうる境地にまで到達している。

はかない個体の—生涯などを別にして、種族の生命に思いを致すとき、生態学こそが必要な指針をわれわれに与える生物学部門であるといえる。種族の生命を決定するものは、個々の個体の生死であるよりは、個体群とその環境のありかたなのであって、これまで盲目的にその科学技術文化を成長させてきた人類といえどもそのためしを逃れがたい。地球上の生命の内在的条件をなしてきた自然界の整合性—オーガニゼーション—を具体的に理解するために、その資源の“輪廻”、そこに住む生物種個体群のための“ニッチ”と“役割”生態系の存続に要求される“開放性定常状態”などといった生態学の教えに耳を傾けてみたい。

#### 参 考 書

世上エコロジーはやりの今日、生態学や環境問題関係の出版物は店頭にあふれている。とりあえず次の二点のみを挙げておく。

1. ポール・シアーズ“エコロジー入門”講談社現代新書271 1972年。

2. 日高敏隆 生態学をめぐって(同著者の評論集“人間に就いての寓話”に所収)風濤社、1972年。

第十一講 現代文学における人間像の探究

中川 信

人間の本性とはいったい何か、また人間と世界はどのようなかかわりをもつのかといった問題を問い続けて止めないのが文学であるといえよう。そして文学者たちはそれぞれの視点から、独自の解答を読者の前に呈出し、読者であるわれわれと共にこの問題を考察するよう呼びかけてくる。さて今世紀の文学者たちは、文明化した現代社会に生きる人間についてどのような証言をしているのであろうか。主として二十世紀フランス文学を通して、この問題を考えてみたい。数多い作品のなかから次の四作品を、われわれの考察のひとつの道標として挙げておく。

ジード「背徳者」(1902)各種文庫ほか

ブルトン「シュルレアリスム宣言」(1924)

生田氏訳 人文書院ほか

カミュ「異邦人」(1942)新潮社

ベケット「モロイ」(1951)白水社

